Asian Nurses' Cultural Competence [ANCC]
アジア圏における
看護職の文化的能力の評価と
能力開発・臨床応用に関する国際比較研究

FACT SHEET
2014 JUNE
平成 26 年 6 月 4 日発行　第 1 巻 3 号
千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター
不許複製　禁無断転載
ケア開発研究部 野地有子

Fact Sheet は、CBPR では「わかりやすい言葉で、定期的に、研究活動についての情報をパートナーらと共有する」ために活用します(Israel, 2005,p.298)。本プロジェクトにおいても、Fact Sheet を定期的に発行し、ANCC プロジェクト研究の進捗の概要やデータを共有し、関連するトピックや文献などからの研究成果等も含めます。

Steering Committee Members:野地有子,溝部昌子,李祥任
Steering Committee Partners:北池正,望月由紀,辻村真由子,池崎澄江,田所良之, 鈴木友子,若杉歩
大友英子,西山正恵,池袋昌子,小嶋純,菅田勝也

第 35 回国際ヒューマンケアリング学会における Cultural Competence 関連情報

報告者：野地　有子

第 35 回国際ヒューマンケアリング学会が、さる 5 月 24 日～28 日国立京都国際会館で開催された。参加の機会を得たので、Cultural Competence (以下、CC) に関連する情報収集について報告する。また、本プロジェクトの評価をお願いしている、藍野大学の菅田勝也副学長を大学に伺い、情報提供を受けた。本号によりその概要を紹介する。

1．第 35 回国際ヒューマンケアリング学会の概要

・国際ヒューマンケアリング学会は 35 年前に、レイニンガー博士、ワトソンらが創立した学術学会であり、35 回のうち 28 回が北米での開催であり、次いでオーストラリアが 4 回であった。アジア圏での開催は、今回の京都(日本：法橋尚宏大会長 (神戸大学)、共同大会長マリアン・C・ ターケル (アインシュタン医療ネットワーク)) が初めてとなった。大会テーマは、ケアリングの普遍性であった。参加者数は 781 名と過去最多であり、其の内 500 名余は日本からの参加であった。次いで台湾 50 名、香港、タイと続く。発表演題数は、487 演題であった。レイニンガー博士は、2012 年 8 月 10 日にご逝去され、現在の代表は、マリアン・ C・ ターケルが努める。

・レイニンガー記念講演は、ジーン・ ワトソン (コロラド大学名誉教授) とマリリン・ A・ レイ (フロリダ・ アトランティック大学名誉教授) により行われた。レイは、レイニンガーのトランスカルチャー看護の最初の学生の一人であった。レイニンガーは 1940 年代からケアリングが看護の中核概念であることを示し、世界における多様な文化理解の推進を目指して本学会の設立に尽力した。レイニンガーは、文化的価値に関する知識、信念、態度と個人・ グループへのヘルスケアとケアリング実践が、看護師が文化的ケアの提供をすることを勇気づけるという信念を持っていた。この知見は、医療格差を減らし、医療のアウトカムを向上させ、すべての人々の社会的および文化的正義をともに創り出すことに貢献する。

・With Their Voices Raised は、ドキュメンタリー劇でクロスカルチュラル理解のために作成された 60 分のパフォーマンスである。戦争は最も大きな健康被害であるとの認識を持つ国際研究チームが制作し、米国で 3 回上演され、本邦においては初公開であった。第 2 次世界大戦の真珠湾および広島での爆撃後 70 年にわたって生存してきた日米の被爆者 51 名の体験談から構成される。今回は広島の 3 つの高校の高校生が舞台を努めたが、このことも初めてのことであった。「驚き」「地獄」「平和への願い」の 3 部から構成され、日米両国の体験談が交互に演じられて、日米の語りに多くの共通点が見いだされ、時空を越えて引き込まれた。この「深く理解する」という経験は記憶に残るものであった。おそらく、パフォーマンスを行った広島の高校生の体験も CC に影響したと思われる。

・Understanding Experience across Culture について英国 Leeds 大学の Gary Morris らが、映画を教材にしたメンタルヘルス理解の実践報告があった。映画フィルムの観賞後に、3 つの質問 (Q1 . 映像内の患者個人の経験、Q2.周囲の反応、Q3. 1 と 2 の関係のインパクトは何か) で振り返る。最初に映画で取り扱われる異文化について学習した後に映像で学ぶという教育プロセスが効果的ではないかとの提言であった。Morris 氏に ANCC について概要を説明し、交流を開始した。

・Evaluating the Effectiveness of an Online Patient-centered Caring Curriculum among Taiwan Nurses について、国立台北大学の Jane Lee-Hsieh らが、ADDIE を用いて報告した。「Analyze 分析」「Design 設計」「Develop 開発」「Implement 実施」 「Evaluate 評価」のサイクルで、教育効果を最大限に得られる教育設計(インストラクショナルデザイン：ID) の技法である。台湾の病院における看護師の患者中心のケアリングを高める教材の開発を行い、72 の看護場面のビデオを作成した。1 本 2 ～3 分であり、映

像は看護師ボランティアの演技やイラストが用いられた。日本における ID 研究の中心は、熊本大学大学院社会文化科学研究科の中の教授システム学専攻であり、e ラーニング設計・開発専門家の養成を行っている。実践センターの全国国公私立大学病院副看護部長研修の青木太郎講師(成人教育と教授システム学) は、該大学院修了生であり、ANCC の教育プログラム開発において協力を得ることができる。

2．菅田勝也先生からのコメント

菅田先生は、東京大学大学院看護管理学分野教授を経て、現在、藍野大学副学長・教授、日本看護評価学会の理事長。ANCC プロジェクトの全体評価をお願いしており、進捗状況等全般に対するコメントをいただいた。病院調査のサンプリングについては、市販の病院リストによる 1/3 抽出などもよいが、高額なため無作為抽出でない方法の可能性もあるのではないか、また精神病院のニーズもあるのではないかとのことであった。看護師および看護学生の CC 評価ツールの候補について質問があった。今後も引き続き、定期的なコンサルトを得て進める予定である。

3．「にわか通訳者」に関する研究について

菅田先生より、以下の論文の紹介があったので、本プロジェクトの関連で概要を報告する。

・在日ブラジル人が医療サービスを利用する時のにわか通訳者に関する課題，永田文子，濵井妙子，菅田勝也，日本国際保健医療学会雑誌，25(3)，161 - 169，2010．

「にわか通訳者」は、論文中の用語の定義によると、医療専門通訳として教育や訓練を受けていない通訳者のことで、Ad hoc Interpreter と使われていた。

対象は、静岡県中西部地域に居住するブラジル人の本人や家族で日本の医療サービスを利用した経験者 18 人を機縁法で選定し、3 グループに分けてフォーカスグループデイスカッションを実施、要約的内容分析を行った。18 人中 10 人が通訳者に付き添ってもらったが、すべて「にわか通訳者」であり、家族や友人、または派遣会社の通訳者であり、11 歳の女児も含まれていた。 米国の CLAS 国家基準 (National Standards on Culturally and Linguistically Appropriate Services) には、患者が希望する以外は家族や友人による通訳は提供されるべきではないと明記されている。

「にわか通訳者」の利用に関する課題の最終カテゴリーは 3 つで、「にわか通訳者を介することによる問題」、「医療通訳者が医療機関に常駐していないことによる問題」「意思疎通をはかるための改善点」があげられた。日本の現状において、患者が「にわか通訳者」を同伴した時の対応については、

「にわか通訳者」に対して

① 医師および患者の言葉を正確に伝えること、
② プライバシーの保護について事前説明すること、

医療者に対して

① 医療者が患者に対して医療専門用語を避けてわかりやすい日本語で説明すること、
② 必要事項を文書で書いて渡すこと、

上記等により、意思疎通が改善されると提言している。

永田らは、「日本語で良いので、必要なことを文書で渡して欲しい」という参加者の語りに注目し、文書で渡すことで、自宅に帰ってインターネット等で調べることにより、安全や安心につながると述べている。

参加者の日本語能力のアセスメント分類

・ 会話では、

① 日常生活に支障はない　6 人
② 最低限の意思疎通は可能　8 人
③ 意思疎通はほとんど不可能　4 人

・ 読みでは、

① 漢字・ひらがな・カタカナが読める　1 人
② ひらがな・カタカナが読める　10 人
③ ひらがな・カタカナは読めない　7 人

該データ中には、日本語を話せないため受診を拒否されたケースが語られており、外国人とのコミュニケーションが不十分な時の対処法として「受診を断る」場合があげられた。

米国では医療機関に無料の言語サービスの法的義務化がなされても、医療通訳者の利用は 15％と低く(2009)、電話通訳サービスが主流となっている(2008)ことを踏まえ、日本においても病院負担となっている医療通訳者に関わるコストの問題が指摘されている。

該論文から、本プロジェクトの病院調査における質問項目についても参考となる示唆を得た。

News

1．第 35 回国際ヒューマンケアリング学会にて、辻村真由子が「Behaviors and Beliefs Observed in Visiting Nursing Practice in Japan: A Focus on the Relationship with Home Care Recipients and Families」の発表を行いました。

2．大友英子が企画担当の「東大病院　看護フェスタ 2014 ～思いを繋ぐ看護～」が開催されました。パネル展示、モデル病室、ユニフォーム紹介をとおして、東大病院看護の歴史と今について紹介しました。

日時：6 月 9 日 (月) ～11 日(水)
会場：東大病院入棟 A　1 階レセプションルーム
来場者数：3 日間で延 803 名
約半数の方から頂いたアンケートでは概ね好評を得られたことが判り、看護師への応援メッセージも多数頂きました。

3. 若杉歩が米国研修の帰国報告を行います。

第 7 回学術シーズミーティング
日時：7 月 9 日 (水)　12：10～12：40
場所：セミナー 1
テーマ：MD Anderson Cancer Center 研修報告